

『兼ちやん』

東京女子高等師範學校教授

岡田みつ

第六、「海邊」

「オイ兼坊、お前脚が早くてお祖父さん困るよ。」
と原田の老人は息せわしく言つた。かれは日當りの良い午後を、兼公の手を引いて東濱の海沿ひを歩いたゐるのだつた。

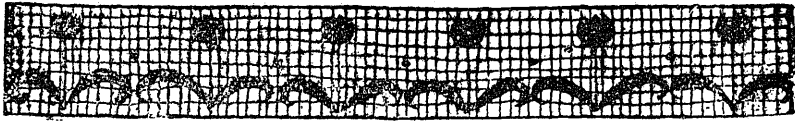
「あたゐ、もつと早く歩けるよ、お祖父ちやん。」

「さうだなア。お前の身體柔軟なもの！ だがな、船はまだ三十分もしくちや着かないから、すこし此處に座つて休まうよ。お祖父ちやんは年寄りだからな。」

「あゝ、ほんとに年寄りだね。」と兼公が同意した。

「そんなでも無いンだせ」とお祖父さんは狼狽して答へた。

二人は海に面して腰掛けた。兼坊は、先刻から往來を曳づりくして來たブリキ製の玩具の汽船を手繰りこみに取かゝり、老人は手馴れのパイプを小函から取出し、新聞紙の栓



を抜いて、新に煙草を詰め、七八本マツチを無駄にしてやつと火を點けた。

五分程経つと兼公が、

「やア、船が來た。」と絶叫した。

「どこに? ……あなるほど。でもあれや違ふよ。黄色い煙突が二本立つてるのでなく
つちやいけない。」

「あたい、黄色の煙突より赤い方がいゝ。何故母ちゃんは赤煙突の船に乗つて來ないの。」
「母ちゃんはな、海が嫌ひなんだよ。黄色い煙突の船の方が赤いの程長く乗らないでいゝ
からそつういふ譯なんだ。さ、之を口にお入れ。」

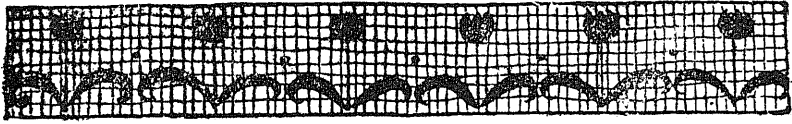
「あたい、薄荷菓子大好き。」と言つて兼公は息を吸ひ込んでつくつく薄荷を味つた。「それ
から、あたいラムネも好き。」と言ひ足した。

「のどが渴いたのか。」

「あゝ。」

「ぢや棧橋へ出る前に一本買つてやらうかね。お前、その汽船をどうしたんだ。そら、つ
ぶれてるぢやないか。」

「他の子が踏んづけたんだよ。」と兼公はその玩具を取り上げて、「でもね、糸がその子の足



にからまつたものでその子轉んでね、泣きながら去つちやつたよ。……………

どうして樂隊やつてないの。」と奏樂堂のあたりを見廻はして尋ねた。

「まだ時節でないもの。」

「何故時節でないの。あたい樂隊好き……大きな太鼓のあるのね。明日のあさ樂隊ある？」

「ないよ。夏にならなくつちやないよ。お祖父さんはこの咳が癒らなければ、夏までこの東濱に居るかもしれない。そうしたらお前お祖父ちゃんとお祖母ちゃんどこへ泊りに來てな、赤螺を拾つたり、海水浴をしたり、樂隊をきいたり出來るよ。」

「おぢいちゃん、今でも咳が出るかい。」

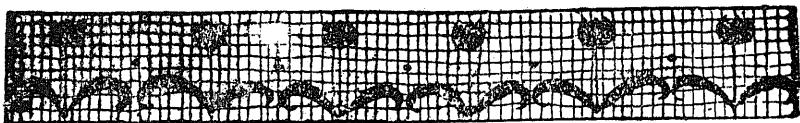
「あゝ、夜になるといけないだよ。」

「あたい、せんに大變咳が出たよ。」と兼公がしんみりいひ出した。そんとき肝油のんだのお祖父ちゃんも肝油のむと夏にならないうちに快くなるかも知れない。」

老人は微笑して、

「夏にならないうちに、お祖父ちゃんの咳が癒る方が好いのかい。」

「あゝ……そしてあたい東濱にも來たいんだよ。あたい、赤螺は嫌ひだけれど拾ふの大好き。海水浴はいやだけれど水ん中でポチャ／＼やるの好き。」



「お祖父ちゃんも、肝油を飲まうかね。」

「まづいよ。……でも夏にならないうちに咳が快くなるかも知れない……東濱つていよと
こだね……」

「あたい水を見てくるよ。」

と言つて兼坊は腰掛を迂り下りて、汽船を曳きづりく／＼廣場の柵のところへ歩みよつた。

「そこへのぼるンぢやないよ。」と原田の老人は狼狽し立ち上り「落ちたら死んぢまふよ。」

「今日は水が澤山あるね。」と兼公が話しかけた。祖父は孫の身體に手を掛けて押へてゐる

「あ、今、汐がさして來るとこだから。」

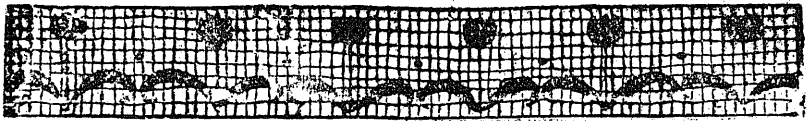
「やア、ちいさな魚が居らア。お祖父ちゃん、見えるだらう。あすこにも居らア。」

「お前の方が視力がいゝからな。いけないく、そんなにのぞきこんぢや。お前泳げない
だらう、それだからもし落ちたら母ちゃんは何ていふだらう。」

「母ちゃん油飲ませるよ……肝油でない、も一つの方のを。肝油よりもつとまづいよ。あ
たい今この船をうかせるの。」

「こゝで浮かす事は出來ないよ。」

「出來るよ。そうね。」といひく／＼兼公は汽船を縁ごと低く垂らして三尺程下方の水面に觸

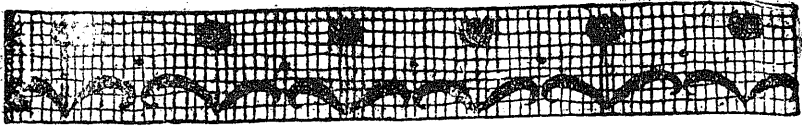


れさせた。船は幾度も水に浸りかげたが、やつとまあ、どうやら浮くやうになつた。「走るく。」と兼公は絲を急に引いては、大満悦で怒鳴つてゐた。その中に絲が彼の手を迂りぬけてしまつた。兼公は途方にくれてお祖父さんに訴へた。

「可哀さうに、困つたな。」とお祖父さんは言つて、そこらに、船で出てゐる人はないかと眺めまはした。

「あたいの船が。あたいの船が？」と兼公は泣いた。

原田の老人は苦しさうに呻吟ながら兩膝を突き、パイプを地面に置いた。そして岸から身體を乗り出してステツキの先で絲を引かけやうとした。五六分も之を續けたが、うまく行かず、その中に兼公が船が沈み想だと騒ぎ出した。なるほど沈みさうだつた。その船は、陸に居るとき散々な目に遇つて大分害んでゐたところへ、おまけに踏みつけられたりしたのだから、哀れにもだんく／＼水が入つてもう今では徐々に、しかしまちがひなく沈没しかけてゐたのである。老人は、困却のあまり、ステツキで船の金屬製綱具を引掛けて救ひ上げやうとしたが視力はわるし、手は慄へるしで、却て船の中腹を一突き突いたかたちとなつて船の沈没を早めてしまつた。惜しや船はグ／＼沈んで十尺の海底に落ちてしまつた。そしてその所有主はたゞ眺めて「あたいの船が、あたいの船が！」と泣くばかりだつた。



老人は、膝頭を撫でつ、咳をしつ、起ち上り、

「どうも残念だなア。」と言ひかけはところ、

「ガチャリ！」

「あ、バイブがバイブがあゝ禍は決して單獨に來らずとか。

兼公は大切な船を失ひ、原田の老人は秘藏のバイブを踏まれてこつば徹塵にしてしまつた

「あたいの船が！」

「おれのバイブが！」

幼童は落膽して海底を覗き、年寄は、暗い顔をして地を見詰めた。

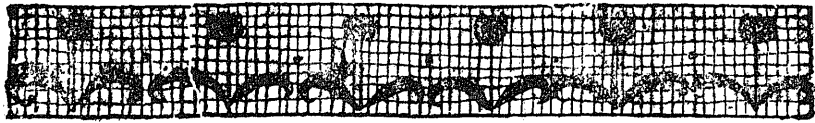
「泣くんぢやないよ、坊。」とやつと老人が言ふと、

「泣かないよ。」と答へて、兼公は袖で涙を拭き、しきりに鼻を擧つてゐた。それからはじめて祖父の身に起つた不幸に氣付いたと見えて、

「どうして……」と言ひかけたが祖父の顔が何ともいへず情なさうなのに、あつけにとられて黙つてしまつた。

老人は、見すばらしい巾着を取出して、

「兼坊、潮が引いたらお船はとれるかもしれない。



あすこに居る人に頼んで置いてやるからな……だから、お前泣くんでないよ。」

「泣かないよ。」

「ほんとに氣の毒な事したな。そんないやな顔をして母ちゃんを出迎へてもらつちや困るぞらよ、十錢やる。店のあるところへ走つていつて、何でも好きなもの買つといで。お祖父さんこゝに待つてるから。いゝへ、遠くへ行かないで……向ふ側でいゝ。そして急いでいつといで……母ちゃん船がもなぢき着くからよ。」

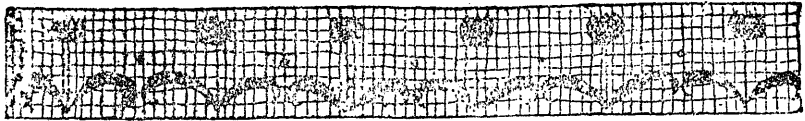
これだけ言つて、老人は一つ大きく溜息を吐き、今一度足許のバイブの破壊を眺めた。

そのバイブは記念に贈呈されたもので彼が此上もなく珍重してゐたものだつた。この五六年友達に向つては、「之はおれと同様、だん／＼古びるが、まだ命はあるよ。」といふのが癖だつた。それが今日といふ今日とう／＼駄目になつてしまつたのだ。

「お前買ひに行かないのかい。」と老人は孫が十錢銀貨を眺めてゐるので尋ねてみた。

「行くんだよ。」と彼は答へて「ありがたう。お祖父ちゃん。」と付け足した。……始めて親母の教訓を思ひ出して。そして顔ちうを嬉さにみなぎらして走り去つた。

原田の老人は、兼公の姿が雑貨店へ入るのを見すましてから、屈んでバイブの破片を拾ひ集めて赤ハンケチに入れ、かくしに大切さうに仕舞つた。それから兼公の船の沈んだ個



所に覺えをしておいて貸ボート屋の男のとこへとぼとぼ歩いて行き、引潮のときに拾ひ上げて呉れと頼んだ。兼公は、どうしたかしらと思ふ間もなく、坊はガタ／＼何かを曳づつて嬉々として戻つて來た。

「また船を買つたのかい。」と老人は少し失望して尋ねた。貸ボートやが難破船は大丈夫引上げられるといつたのだから。

「船ぢやないや。動物だよ。」と兼公はにこ／＼した。

「動物？」

「あゝ、「にわ」ツていふもの。」

「何だつて。」

「にわ！ 店の小母さんがそいつたもの。この尻尾！ 泳げるんだよ。だけど、あたいもう水に入れないんだ。」

老人はその玩具を検査した、

「あゝ、さうか。これはエ……、エートがくによツていふもんだ。」

「そうぢやないよ。にわだよ。」

「さうかい。何しろ妙なものを買つたもんだが、お前の氣に入つたら、それでいゝや。さ

母ちやんを迎へに行く時間だよ。」

兼坊は不用た方の手で祖父さんに手を引かれて、棧橋の方へ出かけた。一二分黙つて歩いてゐたが、

「あたいにはに十錢みんな費はなかつたの。」と話した。

「そうかい。いくらで買 たんだい。」

「六錢。あたい、ボールもすこし買ったよ。」

「そうか。」

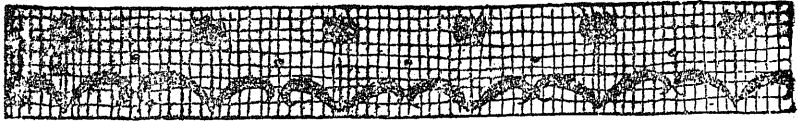
「でも四錢みんな出さなかつたの。」

「ちや二錢財布にのこして置いたのか、賢いな。」

「そうちやない。お祖父ちやんにツてパイプを買つたの。」とにや／＼笑つて祖父の手を離し、かくしに手を入れた。

「それは／＼。」といつて老人は兼公から小さな包みを受取つて、「この子がおれの事を思つてくれるとは！」と獨語した。かれは、兼坊の頭を撫で、包み紙をとつた。

「これね、上等のパイプだつて。」と兼公が説明した。「コン中へ水を入れてね吹くと鳥みたやうにビエツと鳴るんだよ。」



老人はなさない贈物を手にもつたまゝ、明いた口がふさがらぬ體だつた。暫時は、彼は物も言へなかつた。それから「これは、はや！」といつて聲を立て笑ひ出し咳が出て苦しくなるまで笑ひつゞけた。

「お祖父ちゃんこのバイブ好きかい。」

「好きだともく。」と老人は口がきけるやうになつた時に答へた。「お祖父さんのバイブ見たら、お父ちゃんがさぞ笑ふだらうな。お前、お祖父ちゃんにこのバイブの吹き方を教へてくれなくツちや、な。」

「あ、教へてあげる。」と親切めかして兼公は答へてそれが楽しみさうに見えた。

「お船の來るのが見えるかい。」と老人がしばらくしてから訊いた。

「あゝあの燈臺のところから來た。」

「まだ、すこし間があるだらう。棧橋に腰をかけよう。」

「あ……お祖父ちゃんあたいのどが渴いた。」

「しまつた！ ラムネの事を忘れてゐた。何とかして上げやうよ。」

(第六の了り)